

「児童の世紀」を振り返る

—その十二—

本田 和子

子ども王国の変貌Ⅱ受験戦争への突入

のびやかに、パワフルに、子どもたちの時間を謳歌していた筈の彼らの世界に、異変が起こり始める。義務教育を終えようとする彼らの前に、高校受験がの

しかかってきたからである。大量の子ども集団は、大量の受験者集団に変化し、激烈な受験戦争に突入する。

当時の母親大会のスローガンとして、しばしば掲げられたのが「高校全入」であった。一九六〇年の

中学生人口は約五九〇万人、それに対して、高校生総数は三二〇万強。全入とはいかぬまでも、高校進学率は既に五〇パーセントを越して、高等教育への志向は、急速に人々を支配し始めていたのである。

このことは、戦後の体制の変革と無縁ではない。

戦後処理の一つとして推進された農地解放や財閥解体、それに加えての個人資産の統制などによって、先祖からの遺産やなまじつかの財産など、生涯の安穩を保証してはくれないと知らされた大衆の意識は、子どもたちにより上級の学歴を持たせることで、将来に対処しようとする。従来は、ともかく家業を継げばよいとされていた子どもたちも、より上級の学校に進学し、自身の将来を自身の力で切り開くことを期待され始めたのであった。

加えて、華族制度の廃止や財閥・地主の解体など、いわゆる特権階級の身分剥奪により、大衆の平等意識に火が点けられたことも一因であろう。士農

工商の身分階層の解体された明治維新期と同様、

「学歴」が上位階級への移動を可能にするものと幻想され、学歴志向が加速化されたのであった。戦火に弄ばれて進学どころではなかった親たちにとって、わが子の上級校進学が生きがいの一つとなり、結果として、「進学」と「受験」が、子どもたちの前に辛苦に満ちた関門として立ち塞がる。しかも、時あたかも、ベビーブーマーの世代。母親たちの全入の願いも空しく、約半数は落伍者とならざるを得ないのが現状であった。同年のマスコミには、「中学浪人」という言葉が出現し、話題を呼んでいる。

中学校が、急速

「進学予備校」と

化し、偏差値学力

による子ども振

るい分けが積極的

に推進されたの



も、こうした実情からみてやむを得ないことではある。母親たちの「高校全入」という願いを何とか実現させ、希望者全員をどこかの高校に入学させねばならないとしたら、とりあえずの帰結として、そこに生じるのは学力による選別と分類に他ならない。

本人の志望は別として、合格可能な高校をあらかじめ予測して、それへの対策を効率的に講じること。

これが、中学校における進学指導のつとりばやの方針ということになれば、偏差値学力の向上のために、親子教師こぞって狂奔する羽目になるのも無理もない。

管理され個別化される子どもたち

それまで、手に終えないと放置されていた子どもパワーは、急遽、「進学」「受験」という標的に向けてコントロールされることになった。受験指導者と化した教師たちが、「高校合格のため」という錦旗

を掲げて、それまでの意気消沈ぶりを忘れたように精神的に腕を振るい始めたのであった。クラブ活動や自主学習を重視し、子どもたちの個性の解放をキャッチフレーズとした戦後の学校教育は、このあたりでその幕を下ろし、子どもたち一人一人の差異は、個性ではなく選別の目安として振るい分けに使用される。そして、この急変ぶりについて行けない子どもたちが出現し、不登校・長期欠席などという言葉が私どもの耳目を脅かし始める。

「不登校」とは、子どもたちが、自身の身体行為において学校の在り方に異議申し立てすることであらう。それに対して、一方では、より過激な行動も現れる。すなわち、膨れ上がった子どもたちの群れに対して、一時は手に負えないと放置しながら、ほどなく「受験」を盾にして強制と束縛を開始した大人たちの無節操ぶりに対して、不登校のような消極的抵抗ではなく、学校を嫌悪し拒否する子どもたちがや

り場のない怒りを爆発させて校内で暴力を振るうのである。とすれば、当時、しばしばメディアを賑わした「登校拒否」と「校内暴力」は、この意味で、同じ盾の表裏の面と言うことが出来よう。

ところで、この同じ一九六〇年代に、東京都は子どもたちの路上スポーツ禁止を通達している。過熱化したモーターゼーションの帰結であり、子どもたちを事故の危険から守ろうとする措置ではあったが、規制されるのが自動車ではなく、「子ども」であったところに、この時代を徴付ける「あるもの」が、こっそりと顔を覗かせているように思う。すなわち、子どもへの対処に際して、彼らのニーズを掬い取るにまして、管理による効率を優先させる、という……。道路を格好の遊び場とする子どもたちの心理などは等閑視され、交通効率が優先された通達が出されたのがその何よりの証ではないか。

その結果でもあろうか、一九六三年ころから遊び

場不足の深刻化が伝えられ、相次ぐ冷蔵庫内の子どもの窒息死がニュースを賑わす。つまり、遊び場としての道路を奪われ、原っぱの減少に不足を託った子どもたちが、廃棄物置き場の空き地で遊ぶさなかの事故が、冷蔵庫事件ということなのだ。ここから聞こえてくるのは、進学と受験で締め付けられ、遊び場も奪われた子どもたちの悲鳴ではないだろうか。

そして、大人世代に対する子どもや若者たちの大規模な異議申し立てが起こる。一九六八年、東大医学部から発生した紛争は、全学部に広がり、やがて、全国規模の大規模な学紛争へと拡大して行った。言うまでもなく、一九六八年といえは、ベビーブーム時に生



まれた赤ん坊が大学生になっている。そして、ブームの末端は高校生として熾烈な受験勉強に明け暮れていた。大学生は「大学闘争」というかたちでゲバ棒を振るい、受験生たちは、「家庭内暴力」という新語でマスコミを震撼させる。一九六〇年代は、まさしく暴力の季節であった。

大人世代は、膨張した子ども・若者集団に対抗すべく、遅ればせながら「管理主義」を持ち出し始めていた。マスとして追ってくる子ども・若者の巨大な力に対抗すべく、管理方針の徹底を期そうとしたのである。「任命教育委員会法」が公布され、一九四八年「教育委員会法」が公布されて以来の公選制に終止符が打たれたのが、一九五六年であり、「大管法」が世間を騒がせたのが一九六二年であった。これら一連の出来事が物語るのは、行政レベルでの管理強化の動きであろう。加えて、個々の学校内部でも、「校則」という形の子どものたちの生活コ

ントロールが開始されていた。一九六四年、メディアは、大阪箕輪市の高校で、長髪問題で生徒一〇〇〇人が騒ぎだし、警官・機動隊一〇〇人が出勤して沈静を図ったことを報じた。また一九六六年には、神奈川県下の高校で、校風に反発した生徒二二〇〇余人が授業放棄の拳に出たことを伝えている。

自由奔放に跳梁する子どもの大集団に周章狼狽して手をつかねていた大人集団が、漸く、態勢を立て直そうとしたその時、受験希望者数と目的校との間の不均衡から、当然のことながら受験競争が激化し始めてきた。大衆層に広がった学歴志向が、それに拍車をかける。そして、この動きは大人たちを利し、「偏差値」「内申書」など強力な武器を手に入れた大人たちは、子どもたちを徹底した管理統制の網の中に掬い取ろうと試み始めた。その帰結として、とにかく「合格許可証」を手に入れるまでは大人の管理支配を受け入れる者がいる一方、不服従の意

志を「登校拒否」や「校内暴力」、果ては「家庭内暴力」の形で表明するしかないという、追い詰められた者たちが出現したのだった。

軌を同じくしてわが国経済は上昇期に入り、「岩戸景気」と呼ばれた一九六〇年に一六・七兆円だった国内総生産が、七〇年には約四・七倍の七五・三兆円に達した。と同時に、働く者たちの労働時間も六〇年の出勤日数の月平均が二四・三日、七〇年には二三・二日に達し、大人たち、つまり子ども親世代は、先進国では最高の週六日の出勤で、ドイツなどと比較するとほぼ一・三倍程度の忙しさのなかに巻き込まれていった。しかも、経済戦争に巻き込まれたのは大人だけではなく、一九六三年の経済審議会による答申「経済発展における人的能力開発の課題と対策」により、能力主義教育が強調され始めたことで、子どもたちもまた、財界の求めに応じた能力保持者たるべく、いまの学校生活を準備に当て

るという事態に追い込まれていく。

結果として、一九六〇〜七〇年にかけてのわが国は、わき目も振らずに働く親たちと、将来のためにと管理の強化された学校教育の支配下で、不満を堆積させる子どもたちとが、住空間だけを共有しつつ各個バラバラに暮らし始めた時代と言うことになり、「カギツ子」が社会問題となり、メディアに取り上げられるのも、このころからであった。

出生率増減の悲しいパラドックス

大人世代の子どもパワーに対する対抗措置として、「遅ればせながら」の管理主義が試行され始めたころ、皮肉なことに当の子ども軍団の数が減り始めて



いた。ベビーブームとは、戦後のつかの間の現象に過ぎず、出生率は、鮮やかなまでに低下の一端を辿り出したのである。因に、その変動を数値で示せば表1のようになる。

一九七〇年の第二次ベビーブームで少々盛り返した出生数は、しかし、その後は凋落一方である。第二次ベビーブーム世代が成人し、結婚年齢に到達している現在に至っても、その傾向は変わらない。わが国の場合、一日の出生数が五〇〇〇を上回り、特殊出生率も三・〇を超えることなど、到底、望むべくもないということのようだ。

ところで、というより「にもかかわらず」と言うべきだろうか、あなたも子どもパワーへの対抗策のように登場した「管理主義」は、状況の変化にためらうこともなく、むしろ日増しにその力を蓄え、圧力を強化していった。その揚げ句に、登下校の時刻や制服・持ち物、果ては髪の色や長さまで、微に入り

▼表1

年次	1日の出生数	年間出生数	特殊出生率
1950	6,404	2,337,507	3.65
1960	4,388	1,606,041	2.0
1970	5,299	1,934,239	2.13
1980	4,308	1,576,889	1.75
1990	3,347	1,221,585	1.54

厚生省「人口動態統計」…人口問題研究所「人口問題研究」)

細にわたって子どもらに干渉し統制して、学校をさながら刑務所か軍隊のように、規律と規則の猛威を振う場所へと変貌させてしまったのであった。受験競争の激化に伴い、「内申書」という武器を片手にして……。

膨張した子ども人口が、学校教育のなかに図らずも残してしまった負の遺産、その一つが「管理主義」なのだが、それに加えて、今一つ、「受験競争」もそれであると言えないだろうか。前者が子どもパワーを押さえ付けるための大人側の苦肉の処置だとしたら、後者は、大勢の同世代をかきわけて何とか勝者の椅子に座ろうとする者たち、より正確には「座らせよう」と願う親たちによって、作り出された悲しい対策だったのである。しかも、この両者は、本来なら、少子化とともに消えていつてしかるべき種類のものであるにもかかわらず、以後もすっかりと生き残り、それどころか、益々健在で猛威を

振り続けている。

学校教育に関しても、子どもの数が減れば、一人一人に即して丁寧な個性教育が実施可能となる筈である。ベビーブーム世代には想像もつかないほどの、子ども対教師の心の通い合いと、羨ましいほどに行き届いた義務教育が実現されてしかるべきであろう。因に、小学校児童と教師の比率とその変動は、表2の通りであった。

この資料によれば、ベビーブーム時代には、五〇人学級を余儀なくされていた小学校も、一九七〇年以降は三〇人未満の学級構成で、行き届いた指導が可能となった筈である。この傾向は、中学校の場合もほぼ同様である。たとえば、一九六五年には三



▼表 2

年 次	児童総数	教師総数	比率
1960	12,590,680	360,660 (-5000)	40.5
1970	9,493,485	367,941 (♫)	29.7
1980	11,826,573	467,953 (♫)	28.2
1993	8,7688,81	438,064 (♫)	22.6

(文部省「学校基本調査報告書」)

七・七だった比率が、一九七〇年には、二七・〇と減少している。つまり、教師一人で約三八名の責任を持っていたのが、五年後には、一〇名減の二七名でよくなったと言ふことなのだ。

しかし、変えられたのは、学級規模の大きさではなかった。私どもに身近な幼稚園に関しても、クラス規模四〇人という数字が、いつまでも付きまとい、保育者たちを悩ませたことは周知であろう。子ども数の減少にもかかわらず、教師たちの指導態勢は「マス」から「個」へと変わることもなくて、逆に「子どもたちの自由」を制限する方向に動いた。管理を厳しくして規則を徹底させ、失われた規律を回復させる……。アナクロニズムとも言うべきこの方針は、しかし、抜本的な検討もないままにその後の学校生活を支配し続けることになったのである。

(聖学院大学)